わこのみ
猫蓑通信

第４１号
平成十二年
（２０００）
１０月１５日発行
（年４回発行）

ＩＴ時代と連句

東　明雅

ＩＴ時代を迎え、猫蓑も四月、井上鶴鳴さんたちの力でホームページを立ち上げた事は、皆さんご存じの通りである。早速、私や式田さん、また立机した同人の方々の作品が発表された。私はまた別にほぼ同じ頃、豊田の矢崎藍さんのホームページに、矢崎さんと川西の片山多迦夫さんとの三吟、ファックスで巻いたものを掲載してもらった。しかし、これらはいずれもＩＴの機能の一部を利用させていただいたに過ぎず、本当のＩＴ連句とは言い難いであろう。真のＩＴ連句とは、手紙やＦＡＸの代りにコンピューターを使って文音したり、いろいろ読者と交流するものであろうが、そのうち注目すべき例として、矢崎さんの場合を紹介してみようと思う。矢崎さんのホームページも初めは読者の交流の場であったが、やがてそれらの付合の中から三句目、四句目を続く鎖連句が生まれ、この十月には六千句目にも達するだろうと言う。

そもそも鎖連句（鎖連歌）という形式は、前句付の一種であり、新しいものではない。連歌の歴史を辿ると必ず出て来るが、二句一連の短連句に対して、三句以上の不定数句を鎖状につらねたもので、百韻の定型が出来るまで、平安後期から鎌倉初期ごろまで行われた。矢崎さんは初から鎖連句を作るつもりはなく、自然発生的なものであるが、それだけに、その本質はむしろ笠着連歌に近いのではないかと思う。

笠着連歌とは「俳諧大辞典」によれば、「参詣の僧俗が列座の礼儀にかかわらず、蓑笠を脱がずに口々に句をつけて行く連歌」で、北野天満宮・大阪の安居天満宮でも行われたと言う。編笠に顔を隠し、作り声で色々の作り名を書かせたというところが、この名の由来であろうが、連衆が不特定多数で、しかも、連衆同志が互いの正体を知らぬという点が、ＩＴ連句と共通した特性であろう。

それにしても、十月には応募句が六千句目になるとは、同じ前句付の川柳点で、応募句が二万三千余句に上ったという記録（明和四年）と比較するのは無理ではあるけれども、連句協会の会員が千人に足りない今日の連句界にあっては、まさに驚くべき数であり、これはまさに新しいＩＴ連句を生み出そうとするエネルギーの大きさを物語るものであろう。

ただ、このＩＴ連句の一形式としての鎖連句は、漸く試作第一号が進行中で、まだ満尾もしていないのであるから、現在の段階では海のものとも山のものとも分からない。この連句が本当に文学として成り立つか否かについては、今後、解決しなければならぬ問題が多いだろう。思いつくまま、その一、二を挙げておこう。

先ず、従来の連句は座による連衆心の産物と言われて来た。このＩＴ連句では座はともかくも、連衆心はなかなか生れ難いのではあるまいか。しかし、たとえ見ず知らずばかりの連衆による一座であろうとも、捌きが優しく、連衆が納得するような捌きをすれば、必ずいつかその一座に連衆心が生れ、よい作品が生れるように、ＩＴの場合も捌きの力で、連衆心を生むことは可能であろう。

次に、私は曽て、その作品が、どのような形式を採っていても、どのような式目を採用していても、一巻がきちんとよい付けとよい転じで捌かれているならば、その一巻は、連句を認めようと言ったことがある（「季刊連句」創刊号）。それは今日も一貫した私の信念である。この鎖連歌はべらぼうに長い形式であるから、とても歌仙の百韻の式目では間に合わないであろう。そのような場合は新しく、分りやすく、合理的な式目を考えるべきであろう。

パウル・クレーの線と色

華　尤子

パウル・クレーに「調和のある混乱」というタイトルの小品がある。かつて滝口修造に「パウル・クレーは二十世紀絵画に一つの生きた神話（ミトス）を作った画家である」と言わせたクレーの晩年の作品の一つである。ジュートの上に木炭で、折れ線や曲線があちらに行きこちらに曲がり、複雑な混乱したかたちが描かれている。お互いのなにげない線は動的関連をもって浮かび上がり、混乱そのものが、ある調和を生み出している。画家は一つの画面と素材という制約の中で、線と色を気体分子運動をさせ彼の世界の詩を語ろうとしているようである。

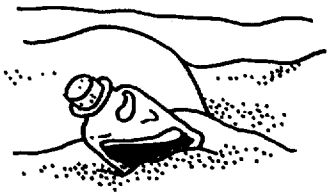
クレーの線は一本の線から次の線へと時間を移らせ、そして「時」を木炭の線の中に内在させている。画面に一本の線を引くことで何かが現れてくることを画家はよく知っている。この線のつながりとつながりは、まさに、式目という制約の中で、端的に自然、恋、無常、死や宇宙観までも、いろいろな発想で詠み込んでいく連句の世界にも通じるように思える。

この木炭の線の合間に、遠くの夜空に浮かぶ月のように、小さいが鮮明な黄色い丸が三つ点在している。「月の定座」かも知れない。また、これもジュートの上にパステルで画いた「夜の花びら」という彼の小品があるが、これは曲線によって囲まれた色面と円の組み合わせによって多彩な叙情を創り出している。この絵の中のメタモルフォーゼは夜の花びらが濃いブルーから淡いブルーへ、ちらりとピンクを粧おいながら舞っている色彩であり、この色彩が歌仙を巻いているようにもみえてくる。

私が連句が楽しくて面白くて仕方がないのは、このクレーの色や線のように、ある種の制約の中で、次々と先へ先へと進んでいく発想の妙味かも知れない。また、この過程は、私にとって、１３０号（194×162㎝）のキャンバスに向かって絵を描こうとする時、まず下地を作り構図を置く「序」の段を過ぎ、絵の具まみれになって画く「破」の段があり、そして最後の仕上げに向かう「急」の段があり、それぞれの段が連句の付け進めの流れと重なるのである。特に歌仙や百韻などではその感が強い。序破急は、音楽や舞踊、舞楽の世界の三区分の流れから来ていると言われているが、連句、特に歌仙や百韻などの場合、序はどういう風にゆったりとしなやかに始めていくのか、破は中でも山をつくり谷を穿ち、さめきつつ何を盛り上げていくか、そしてどのように急として逸興のうちにさらさらと早く終わらせるのか、式目の枠の中でモンタージュすることは、まるで詩人になった心地である。

ところで、詩人であり、映画の戯曲、絵画など芸術に広く才を表したジャン・コクトー、彼の詩は非常に立体的であると言われているが、例の「耳」と題する二行の詩（カンヌ第五）「私の耳は貝の殻　海の響きをなつかしむ」がある。また、芥川龍之介の「青蛙おのれもペンキぬりたてか」も、色と形を巧みに利用した絵画的モダニズムの詩であるともいえる。嶋岡晨氏はこれら詩（ポエジー）のあることに俳句のエスプリを求めたいとしている。

クレーの、素朴な線でありながらの複雑さ、混乱に内包された調和、さらに色彩に紡ぎ挙げられた詩のごとき絵、またコクトーなどの詩人の直感的な鋭さに支えられたモダンな切り口。これらはまさに一巻の連句にも通底するもののようである。このような詩的世界を盛り込むことが私の楽しみであり、日常性を突き破るような句を作ることが私の憧れなのである。



発句と俳句

小池 啓子

朝日カルチャー連句教室へ入ってから早いものでもう二年半になる。俳歴数年ののち連句入門した私にとって、一番心にかかるのは発句と俳句の違いである。それは自分の句の中でどういうものが発句向きなのか、どうしたらいい発句を作れるのか、そして又俳句のルーツを考えることでもある。

―発句は今日いうところの俳句と大略的に同じであるが、俳句との違いは一句で完全に一つの世界を形成して他を寄せつけないというようなものではない―（『連句辞典』）

確かに俳句は脇句を寄せつける形では決してないが、私にとって秀句とは、果てしなく他をひきつけ、いろいろなことを想起させ、響き合うものだと感じている。

「連句教室で発句はダイアローグで俳句はモノローグと教わった。しかし俳句も又自身を含む自然とのダイアローグだと思う」などと書き付けてもいる。句会に出席すると、こうまで言われてしまうともう何も言えないという句に出会うことがある。私は以前からそういう句が嫌いで、いくら完成度が高くても採らず、自分では作らずを実行してきた。やはり連句向きだったのかもしれない。

最近偶然図書館で「発句帳」なるものを見つけた。これは「菟玖波集」をはじめとした連歌の発句集で、現存する活字版を資料とし研究編を加えたもので、その古活字版は少なくとも慶長年間には存していたものらしい。宗祇や紹巴の発句が春夏秋冬の部に分けられ季題別にならんでいる。まるで歳時記のルーツである。月ならば月そのものを詠んでいるのは脇が補足するからなのだろうと思いつつ、とてもゆかしい。ゆっくり読むことにしよう。

とりとめもない雑文にお付き合いいただき有難うございました。

連句との出会い

―若き日の夏―

若林 文伸

東の山の高みから見渡すと、松本と山形盆地は驚くほどよく似ている。街はその東南に在り、西方に前山を従えた山脈を配す。北流する川、近郊の村里の景色など挙げればきりがないが、この街の中に似るどころか双生の建物があった。旧制松本高と山形高。その本館は大正年間同一の図面で相次いで建てられたのである。山形高が解体された後、奇しくもその校舎を目の当たりにしてその時の事を知った僕は、若き日に慣れ親しんだ教室の中へ時空を移して行ったのだった。

昭和四十六年七月。信大から東先生をお迎えして六日間の連句特殊講義。当時のノート四十六頁、四枚の教材、三枚のレポートが入門講座とは思えない内容で迫ってくる。

「ご名答！」と先生は即座に言われ、瞬間僕の頬が染まった。歌仙「地下街新春」の巻を鑑賞して、「さあこの歌仙のヤマ場は？」に答えた時のことであった。

短句　頬染めてゐた若き日の夏

しかし、この期間頬を赤くしたのは教室の中だけに止まらなかった。当時先生五十五歳、僕は父を失い四度目の夏。信州の話などからお近づきとなり、二日目、「暑いねえ」と、ビアガーデンのお供し、それから連日「味よし」という釜めし店に通うことになったのである。酔った勢いもあってか先生は俄に僕の父親代わりを快諾されていた。

離形の日の山形駅ホームで女子学生達から贈られた紅花を抱えられた先生を、僕は後の方で見送るばかりであった。

その年の秋。帰郷の折先生を松本にお訪ねした。松本駅頭まで先生は僕を迎えに出てくださった。街一番の寿司屋と再会のビールの味を忘れない。しかし普段着の先生のカーディガンの右肘の穴は、二十九年後の歌仙の中でしっかりと詠み込む事ができた。

オ6　颱風圏をそれる休日　健悟
折立 秋澄みて師の袖円き破れあり　文伸

僕の連句はあの「夏の日」からまだ始まったばかりである。

「何が起こるか未来への挑戦」
――連句とインターネット――

矢崎　藍

99年の元旦にホームページ「矢崎藍の連句わーるど」を開きました。トップは念願の連句実況「歌仙ing」。何てったって連句の魅力は作成プロセスの動的空間です。伝統歌仙に正面から取り組む舞台を見せよう。第一弾は山猫庵片山多迦夫とめぎつね藍の歌仙「パンドラの巻」。FAXの文面をほぼ毎日公開します。BBS（掲示板）に質問も出て刺激的な出発でした。

この三月に第二弾。歌仙「風眩し」の巻三吟は、猫蓑庵東明雅登場！　vs山猫庵に加えめぎつねも（コン、ぶるぶる）。

ほぼ一ヶ月の実況を経て校合に至り、明雅先生は「この一巻の付合のおもしろさ（付味）を、インターネットの読者が理解して下さればうれしく存じます（三月十七日）」と書いて下さいました。俳諧師として鍛えられたプロの技量、日本の伝統美意識と精神性を示しつつ拓くあたらしみの世界。未経験者の多いインターネットの連句世界に、お手本の一巻をいただいたつもりです。舞台はまだのせてありますので、ぜひご覧下さい。

まったく予想外の展開になったのがBBSの鎖連句です。当初はホームページの読者の交流、感想発表の場でした。やがて散発する付け合いの中から三句め、四句めと続く鎖が一本。「わあ、つながってるう」と喜ぶ声にあおられ伸びてゆき、番号を付けたのが四月末で160番くらいでしたか。現代人の中で付け句をしても、やはり鎖連句が発生する？　これはわくわくする実験ですよね。

ここで付けと転じを死守すべく根本ルールを定め、投稿の際に直前二句をコピーして三句めの付け句案を出すという型を作りました。これは読者にも常に三句を鑑賞する習慣を要求します。前句との付け合いを読み、ウチコシからの転じに目を見はる。一句一句が未来を開く。この読み方を知ってもらいたい。

でも一日百発言もある情況での連句BBS運営は大変なこと。参加者は連句歴もいろいろで質問も頻発します。長期お休みを二度とり数回の構造改革をしました。私たちがこの場で目標とすることは何か。連句のルールはもちろん、モラルも明記する。スタッフにはころも連句会の聖子さん、慶子さん、渥子さんのほか、BBS連衆から在米の雨乞小町さん、札幌の目吉さん、杏さんも参加。法律、心理学など専門家の助力も得て、いまは一応のレールにのったかなというところです。

先日はオフ会をしました。女だと思った人が実は男であっても、話をしているとBBSの懐かしいあの人に違いない。連句縁って、性をこえるつきあいかもしれません。

この鎖連句の特色は世の中と同時点に存在することです。例えば九月二四日の朝、オリンピック女子マラソンのテレビを切りBBSを開いたら五分前に句が入っていた！

5736　時計台から響く鐘の音　　小晴
5737シドニーの春を尚子が駆けぬける　聖子
5738　綿毛のゴールたんぽぽの笑み　小太郎

たった今の感動を共有できて、「うまい」「やられた」しばし一騒ぎでした。

十月には六千番になりそう。でも急いじゃだめよ。私たちが一日一日を生きるように、誰かと誰かが一句一句をていねいに付けて転じて鑑賞しあい、つながっていこうね。初心者もまじりたどたどしくてもいい。時にきらりと光る付け合い、三句があり、もし十句も玉がころがれば何よりのこと。

ホームページには新聞のコラムも大学の「国語表現Ⅰ」の授業も連動しています。学生BBSは、学生が前句を出す付け句の場です。目下不思議に増殖するインターネット世界。何が起こるかわからない。

でも、連句はいつも未来への挑戦！

（ころも連句会・webBBSめぎつね座）

猫蓑同人会

歌仙「七変化」　青木 秀樹 捌

豪商の昔偲ばん七変化　秀樹
　銘石の上遊ぶ夏蝶　郁子
コントラバス低き音色を響かせて　麻子
　テレビを消してさあてワープロ　美津
寝まる子の頬笑みかすか月渡る　和代
　夜長の汀揺れる海草　政志
味自慢ままかり鮨をお裾分け　郁
　留学の娘の噂話も　麻
黒髪にあこがれて来るフランス人　代
　忍び込みたき部屋を忘れて　志
かんかんに、とろけ、もの言ひ地蔵尊　津
　三時に開く町の銭湯　代
宵の月襤褸市に行く悪友と　郁
　雪割燈を隅で売る爺　津
ボワイエに憧れし頃懐かしく　代
　ヒマラヤン猫青い目をして　麻
酔ひて寝し貴紳埋めて花乱舞　志
　欠伸隣にうつす春昼　郁
校正をやうやう終へし弥生尽　代
　ドアの重たきレントゲン室　麻
南米の旅に出ようと誘はれて　郁
　石の遺跡の天に間近く　樹
木葉菟逢ひたきひとは皆あちら　津
　汗手貫せる僧にうっとり　郁
白秋の二番目の妻去りし謎　志
　小豆粥炊き塗椀に盛る　麻
ポルシェにて息子がふいにUターン　代
　ブリキのおもちゃ今ちゃお宝　同
夕月に初体験の蝗とり　麻
　十字祭で唱ふ賛美歌　津
爽やかに山の出湯のクラス会　郁
　あなたのほくろまだ健在ね　麻
みちのくの不動産王いま何処　志
　藍染の甕でんと置かれる　津
芥川花びら流れ龍の図に　樹
　風船に乗り宙を行く夢　志

平成十二年六月二十一日　於　清澄庭園
連衆　東郁子　内田麻子　桑原美津
　長崎和代　峯田政志

歌仙「夏至光」　秋山 志世子 捌

夏至光の濃淡ありぬ池の面　志世子
　ちろりと見せるかな蛇の舌　孝子
演奏会楽譜をめくる役目にて　碧
　三十五度の礼の練習　健悟
名月は連山の穂をすれすれに　あかり
　キャラメル固く爽やかな頃　千恵子
ロザリオ祭尼僧の笑顔消え易く　孝
　牛売った金何処へ行ったか　悟
美少年睡眠薬で眠らせて　恵
　そこのところはちょっとモザイク　孝
ふんはりと雪積みてをり石灯籠　同
熱燗利いて揺るる寒月　恵
　ポケットの携帯が鳴る田圃みち　悟
滞納の税払ひ終へしと　り
　表札の行成流は祖父のもの　同
エアメールに巴里のスタンプ　恵
　舞塚にうすくれなゐの花の渦　碧
大道芸人しゃがむ永き日　悟
　春手袋自転車のギア入れ換へる　恵
ニューウェーヴは浮動票から　孝
　務めあげ娑婆の空気のうまいこと　り
土堤につくりし紙製の家　碧
　葭切の喧しく鳴く朝まだき　り
母に似し妓よつひに触れざり　孝
　心中か逃げるかロシアンルーレット　悟
解剖図譜につきし巻癖　孝
　遺伝子の情報数多夢と畏怖　碧
黒髪束ね秋の峰入り　孝
　追ひかける月さへ青し鯖街道　同
波紋を描く敗荷の茎　り
　激動の昭和に在りし皇太后　碧
風のシャッポと雨のシャッポと　悟
　湯たんぽも心づくしの奥座敷　り
目出度くならぶ初孫の雛　孝
　花一樹故郷の野にめぐりあふ　世
鞦韆を漕ぐ韓の旅人　恵

平成十二年六月二十一日　於　清澄庭園
連衆　坂本孝子　松本碧　佛渕健悟
　中田あかり　鈴木千恵子

歌仙「梅雨晴間」　上月淳子　捌

名石に触るればあつし梅雨晴間　淳子
足裏も柔く踏める青芝　庸子
手作りのアイスクリームを配るらん　弘子
百円ショップ駅前に出来　守男
連れ立ちて寄席を出づれば月昇り　達子
そぞろ寒しと衿を合せる　庸
水注がれ菊人形の活き活きと　男
いい匂ひする君の耳たぶ　達
にっこりと目線逸らさずサイン会　男
マンション泥棒飛行機で逃げ　庸
このところ自民ばかりが半旗揚ぐ　男
絞ったままに凍る雑巾　達
月の窓膝に乗り来るかじけ猫　弘
パソコンゲーム果てもない子等　達
流行語覚えて保母の勉強中　庸
体脂肪計又も買ひ込み　弘
老若の「みんなの体操」花の下　男
初の雲雀の高らかな声　庸
仏生会すなはち虚子の忌なりけり　弘
従軍牧師チェスの名人　男
故郷の山を夢みてハーモニカ　庸
あなた命と腕に彫ったの　弘
熱帯夜この恋地獄極楽か　達
不況直撃ヒモの懐　男
言問の橋のたもとにお団子や　弘
両刀使ひ父のなつかし　達
騙まし絵を見てより神経失調症　庸
果てなき攻防人とビィールス　達
タイガースのエースとなりて月に投げ　庸
留学生のならす鬼灯　男
銘柄はこれと決めたる新走り　弘
短編ひとつ腹案の成る　達
BSのアンテナお向かひ両隣　男
ガーデニングがはやるこの頃　弘
花の旅夜桜見物濠に沿ひ　淳
春の袷の色のはんなり　達

平成十二年六月二十一日　於　清澄庭園
連衆　久保田庸子　市野沢弘子　近藤守男
篠原達子

歌仙「眩しき鯰」　島村暁巳　捌

清く澄む池泉眩しき鯰かな　暁巳
兄弟連れて軽鳧の一族　明雅
お好みの通奏低音響かせて　壽子
ついうとうととバーバーの椅子　蓉子
下り坂バイクひきゆく宵月夜　泉子
かかしの目鼻離れすぎなり　壽
遠く来て秋田の宿のきりたんぽ　雅
ハルコハルヲと落書きをされ　壽
百匹の羊起きてる添ひ寝床　蓉
処女懐胎の流行るこの村　巳
このほとり鎮める水をぐいと飲み　壽
着地見事にメダル獲得　泉
寒月下第九の調べ流れ出す　雅
根釧原野鶴渡る頃　同
やうやうのシャッターチャンスフィルム切れ　蓉
ほろ酔ひ爺孫が支へる　泉
花訪はば二分のほころび峯の寺　同
縁起絵巻を眺むうららか　蓉
シュリーマントロイの春を掘り当てて　同
さんりんぼうの石に躓く　壽
もううんざりつひに満杯ごみ袋　同
神の諫めか頭痛肩凝　雅
馬は吠え牛は嘶く世に棲みて　同
氷あづきが徐々にとけだし　壽
藍浴衣それどころではないらしく　雅
捕らへてみれば岡惚の女　巳
ジャブばかり打たれハートがじれったい　壽
へっつひの中笑ふ猫又　雅
月美しく天国までは何哩　蓉
野山の彩を染めるバンダナ　泉
ふるさとは至福のなかの秋収　壽
悪たれ小僧代議士となる　雅
ぬるま湯で針千本を呑みし夢　蓉
窓を開くれば噴火する山　雅
北帰行ナップザックに花の瀧　巳
ルーペいっぱい蝶のぜんまい　蓉

平成十二年六月二十一日　於　清澄庭園
連衆　東明雅　杉山壽子　五味蓉子
青木泉子

歌仙「イカロスの羽根」　原田千町　捌

夏至の日やイカロスの羽根翻へる　千町
涼しく渡る白き柱廊　清子
つれづれをかな文字の書に遊びゐて　嫋
内覧会へ誘ふお仲間　けんのすけ
ライラック甘き香りに月ほのか　久美子
子猫くはへてよぎる親猫　昌子
駘蕩と釣糸垂るる人の影　清
愛車の疵は何処でついたか　久
逃げたくも逃げたくもなしあの娘　同
カレンダーには丸がいっぱい　け
大相撲どすこい煎餅よく売れて　清
ことのついでに秋遍路する　嫋
砥部焼の窯を焚きつつ賞でる月　昌
音楽療法効きめ出たらし　け
「神の国」引きずってゐる選挙戦　久
七面鳥のすぐ色を変へ　清
花道のなかばで声をとる主役　け
外すショールは青海波なり　嫋
小盃あければ富士の淑気満ち　清
貘も飼ひたし豹も飼ひたし　け
蘊蓄に倦きれば一言居士が来る　昌
分教場の継ぎ接ぎの床　け
道もなき雑木林に捜査隊　久
乱れ心の口紅は黒　町
火くらげのジェラシーの紐からみあひ　清
夜濯ぎしては脱水機かけ　昌
曾て我党員として西比利亜に　町
凄腕振るひ会社再建　昌
やや寒のロボット急に動きだし　嫋
弓張月に椎の実が降る　同
渡り鳥いつもの場所に研師をり　清
笊碁相手のたしか九十　嫋
意外なり手提金庫の隠し場所　久
ナビゲーターとなれる蜜蜂　け
花夢幻須臾の栄耀を咲き満てる　町
岸に雛を流す子供等　嫋

平成十二年六月二十一日　於　清澄庭園
連衆　下鉢清子　八代嫋　太田けんのすけ
副島久美子　中野昌子

歌仙「夏の庭」　日高玲　捌

水門をくぐる燕や夏の庭　玲
道しるべする白き十薬　和子
取材記者ＩＤカード吊り下げて　朱鷺子
聞き取りにくい同時通訳　ゑみこ
野分だつ雲押し分ける月の影　澄子
障子きっちり張り替へる父　豊美
運動会前へ前へと席を取り　和
ほじくってゐるあんぱんの臍　ゑ
ガングロの化粧落とせばはにかみて　美
巴里はスイスと彼に教はる　朱
先生に守り役もゐる選挙戦　澄
英英辞書を引き悩む夜　朱
つちのこは見つけぬがよし凍つる月　同
北行く列車ストーブを炊く　和
立ち喰ひにこだわるＢ級グルメなり　ゑ
足の魚の目痛み出す頃　澄
卓球台飛び交ふ球に花の降る　ゑ
春のジャンパープレゼントされ　和
教会の若芝を刈る子供たち　美
夢の世界を描く老画家　朱
裏表帳簿合せも忙しく　ゑ
堪へられない昼寝冷酒　澄
銀蠅のやうな男につい惚れて　ゑ
着せた着物は左前なり　和
道説きし孔子の墓の草も枯れ　朱
一七才の口は重たし　玲
あこがれのトライアスロン名を上げん　美
漂流物を拾ひたる浜　朱
大いなる月へ向へる遣唐使　美
今年煙草で先づは一服　和
横丁の隠居が主役海嘉廻し　ゑ
総後架とは斯くなるものぞ　朱
がらくたは木箱の中の宝物　澄
地蟲穴を出ちょっと挨拶　和
風狂の魔心に惹かれ花の山　玲
忘我一刻佐保姫の舞　美

平成十二年六月二十一日　於　清澄庭園
連衆　式田和子　橘朱鷺子　吉村ゑみこ
八角澄子　高橋豊美

歌仙「五月晴」　和田順子　捌

かろがろと踏石飛ぶも五月晴　順子
あの実なんの実杏とき色　志げ子
窓の内かすか汐の香匂ひ来て　冨美
臨時ニュースのテロップが出た　好敏
待宵の町角にゐる夜警団　紀子
鰯の鮨の好きな青年　良彌
ブレーキの甘き自転車秋乾く　美
巫女の耳へとくどきかしこみ　志
手を取りて黄泉比良坂落ちゆかむ　紀
竹さやさやと鳴らす浜風　同
兜町IT株の急騰し　敏
キムジョンイルはおしゃべりな人　志
サッカーの熱戦了へて月高く　彌
寒の鴉が止まる煙突　紀
定年をまた延長し宮仕へ　敏
天下国家は酒の中だけ　志
古の花はといはば山桜　彌
虻蜂とらぬ一村一品　紀
よい子等が柄杓で灌ぐ仏生会　敏
十七才と聞いてたぢろぐ　志
うらやましチンパンジーのIQ度　美
海馬ますます痩せるこの頃　紀
枝打って縊れたくなる爺と婆　志
アッパッパーとすててこの恋　紀
ラブコール携帯エリアに自由なく　志
青道心の物言はぬ口　彌
楽屋でも覇王別姫をそのままに　紀
粉ひき茶碗に疵ひとつなし　美
夜もすがら端正の月賞でてをり　志
ハイドパークに聞くは蟋蟀　順
ワトスン君不思議な霧の事件だね　紀
眠る金鉱二〇〇〇億円　美
霊柩車昭和を乗せて遠くなり　紀
小鼓打てる揚幕の内　志
花盛ん昔紀文が屋敷跡　順
櫓さばき確か春の墨堤　美

平成十二年六月二十一日　於　清澄庭園
連衆　蒲原志げ子　村田冨美　豊田好敏
椿紀子　佐藤良彌

猫蓑会

歌仙「暑さかな」　東明雅　捌

大川にくらげ漂ふ暑さかな　明雅
土用の入りの白き両岸　千町
ティーバーティーチェックの服の似合ふらん　さくや
十円メール親指で打つ　フェイ
千年に一度の月の蝕に逢ふ　蕉肝
厨のすみにちちろ虫鳴き　要子
碁に負けてひとりどぶろく酌む親父　イ
山の神様ねちねちと攻め　要
小説のやうにはゆかぬラブ・アフェア　町
デッドボールが尻にあたって　イ
細胞の記憶は遠き魚のころ　町
回教寺院終る改修　イ
スークには熱気いっぱい冬の月　要
コーヒー豆を仕込む鷹匠　肝
雪男山で昨日も出会ひたる　町
秘密倶楽部へ続く階段　イ
御社にまつり木之花開耶姫　や
蝶になりたる荘周の夢　肝
法学部卒業司法試パス同時　町
歓喜の歌はハーモニカにて　や
街いっぱいくり出す道化師コメディアン　要
若禿かくす増毛の術　イ
金の世に金で叶はぬこと三つ　雅
ハブスブルグの悲劇始まる　要
裸のマハ着衣のマハもミュージアム　町
殺し文句は鼻であしらひ　同
あっかんべー合せ鏡に映る彼　や
カレーライスの辛すぎる月　雅
あと幾つこの世の業の送り盆　町
旅の宿りの秋の絵団扇　肝
こきみよくポキポキカイロプラクティック　町
左脳使って果す通訳　イ
特別機沖縄へむけ離陸する　や
写真をとって廻る少年　同
ヴィオロンの溜息ゆるく花の曲　雅
青空にむけゆらすふらここ　要

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　原田千町　魚冨さくや　青柳フェイ
近藤蕉肝　山本要子

歌仙「大川に」　久保田 庸子　捌

大川に泡一つ浮き梅雨明くる　庸子
簾巻き上げ下り行く舟　順子
躾よくいたづらっ子の正坐して　英子
メンバー決まるけん玉大会　慎二
月出でてクラリネットを軽やかに　弥生
流星飛びし高層の窓　美奈子
恙なくはらから揃ひ施餓鬼棚　順
どうぞどうぞと般若湯注ぐ　英
嘴でころがす朱鷺の受精卵　二
鏡の中の私が好き　生
宇野千代は灰になるまで恋をして　奈
拆の音の冴ゆる書割の月　順
雪しまくペテルスブルグ思ひ出に　英
ナチュラリストのお薦めの旅　二
胃薬と眠り薬と塗り薬　生
牛乳売り場さらりからっぽ　庸
文台は小宇宙なり花充ちて　奈
春挽糸の夢の七彩　順
雛葛籠昔語りのきりもなく　英
サミット笑ふ屋根のシーサー　二
サルーキー*似てもに似つかぬ飼主に　生
孫に教はるITのこと　奈
転職をまだ決めかねてべらを釣る　順
外寝ながらも小銭貯めこむ　英
調理場の下駄の彼氏につい惚れて　二
お臍のピアスこいさんも付け　生
ナイスバディ腹式呼吸の三十年　奈
出雲の神の柱出土す　順
山寂と皆既月蝕始まりぬ　英
松虫の音にしのぶ故郷　二
自転車で稔田走る駐在さん　生
特号活字つらと見遣りて　奈
苦労してクローン人間作るまじ　順
騙し騙され四月馬鹿なり　英
檜扇をくるりと回し花の舞　庸
縹色したうららかな空　二

*犬の種類。エジプト貴族に愛された。

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　和田順子　佐古英子　鈴木慎二
本田弥生　鈴木美奈子

歌仙「炎昼の」　島村 暁巳　捌

炎昼の胸像の眉蜂歩む　暁巳
小石敷きつむ円き噴水　代々子
新築の祝客来る刻ならん　あかり
すこし甘めに豆を煮てゐる　時子
見上ぐれば木の実を降らす月明し　弘子
色無き風の運ぶ弦楽　朱鷺子
芸術祭創作舞踊ひっさげて　同
すんなり伸びた脚が眩しい　弘
逢ふ日のみ浮き出してゐるカレンダー　朱
信じるといふ果てもなき事　弘
自己破産書類一枚抜け落ちて　り
背面ジャンプ海豚しくじる　代
凍て月を指さしてゐる塾の窓　時
大江戸線にはやばやと乗り　り
元祖始祖向かひ競へる饅頭屋　代
社員応募に上る坂道　り
久遠寺の枝垂るる花に数珠を揉み　同
巣立ち鳥らし声の幼し　弘
耕しの合間パソコン講習会　朱
ペンフレンドはパリに在住　代
乙武君帰国会見なめらかに　代
忍者屋敷の隠し階段　同
鈴鹿山越ゆればそこが伊賀の里　弘
棒振りまはす路地の鼻たれ　り
草矢吹き気のあるなしを占ひて　弘
むささび真似て羽交締めする　り
殺したいほど憎いのとまなこ閉ぢ　朱
模範囚なり叩く靴底　巳
月ゆるる五色の絲に願ひごと　代
今年煙草の仕上がりの良き　同
秋造り隣の爺もほろ酔ひに　り
ストレッチャーに俎の鯉　時
出陣の学徒の筆の墨絵集　代
世界遺産になりし僧院　り
花の森分けゆく秘境探検隊　巳
伊豫柑配る汁を飛ばして　時

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　橋野代々子　中田あかり　梶井時子
市野沢弘子　橋朱鷺子

歌仙「花火筒」　下鉢清子　捌

花火筒ごろりと海の日を返す　清子
ひと足ごとに走る船虫　冬乃
麦酒乾す賑はひの中われもゐて　淑代
液晶テレビ色もあざやか　香
振付の着想を得る月影に　英二
辞書さまざまに積んで夜学子　乃
彫刻の森あり林檎の樹の向かう　代
フリスビー飛びポインター駆け　香
ポケットに溶け出してゐるチョコレート代　二
趣味の探偵本職となる　同
聞くにつけ見るにつけても佳い女　子
デイトの最中大きくっさめ　香
凍てし月寺の大屋根さし登る　代
斑鳩の地に石工営み　代
エッシャーのだまし絵にまただまされて香　乃
ウォーキングで保つ健康　代
きらん草二十世紀のこの野辺に　乃
蛙合戦故郷の池　代
山羊の毛を刈る少年と無を論ず　代
原稿締切り記者が催促　香
マジックショーあらぬ方よりカード出て二　乃
親善大使西に東に　代
どしゃ降りを構はず単車走らせる　代
尺蠖虫の宙に浮く足　乃
腸にすとんと妻の一夜鮓　代
いらぬところに仲人が来た　二
ライン河左右に仰ぐ古き城　乃
剥落しるき聖母子の像　代
皆既蝕しようゆせんべのやうな月　乃
ジャックするする登る豆蔓　香
新札にやうやう馴染み爽やかに　代
伝言板は判じ物めく　香
同窓会仇名幼な名呼び合って　乃
コーンパイプを銜へたる髭　代
思ひ立ち卑弥呼の村の花尋ね　子
ちょっとちょっとと誘ふ子綬鶏　二

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　百武冬乃　浅賀淑代　若松香
日高英二

歌仙「慈悲心鳥」　椿紀子　捌

高野まで十一里とや慈悲心鳥　紀子
走井の音探す炎天　玲
ガラス吹き筒くるくると廻しゐて　政志
蔓文様の鉄椅子の形　かりん
月光の射し込んでゐる美術展　澄子
警備日誌をつける肌寒　玲
ITのことあれこれと芋煮会　澄
ロジックでなくマジックな彼　ん
忽ちに女王様のわたしです　紀
ぽろりと落ちて割れた能面　志
売文の徒に交はるもからしばれ　同
醤油かければ笑ふ凍月　玲
栃麺棒猫のじゃれつく長鼻毛　澄
おらが村さにサミットが来る　玲
そのかみの五右衛門風呂のなつかしく　志
蛇穴を出てしばしうたた寝　玲
打ち寄せる波に花びらゆらゆらと　志
退官教授仰ぐ春星　ん
リザーブのバーボン空ける義士まつり　同
誰の手型か自慢げに見せ　志
うしろより河童の視線ふと感じ　澄
真空パックの色気封切る　玲
おちょぼ口しておぢさんの緋縮緬　澄
黒塀に書く恋敵死ね　玲
DNAインディオ族の筈はなし　同
汚れちまった雪の哀しみ　澄
熊を彫る彫師は熊にさも似たり　志
狂騒曲をかき鳴らす宵　澄
子を捨てて逢坂山に月明し　ん
蓮の葉ひさぐ賤の草市　同
文化の日むかし思へば明治節　澄
しけ煎餅のひとつ残れる　玲
暖簾分けされし稼業のバイク便　志
銀の小匙をしまふ抽斗　玲
花満ちて昼見る夢の万華鏡　紀
おたまじゃくしのしっぽ生え初め　澄

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　日高玲　峯田政志　登坂かりん
八角澄子

歌仙「夏の舞台」　豊田好敏　捌

本水の夏の舞台や猿之助　好敏
広き板の間風蘭の鉢　一恵
登山帽かぶり直して頂上に　郁子
記念バッジをコレクションする　千恵子
故郷の棚田に映る望の月　麻子
ひとついかがとままかりの鮨　敏
木(ウ)の実落つ寺の庭掃く若き僧　恵
電子メールに想ひこまごま　郁
待つほどに愛はたかまり強まりぬ　千
髪型変へしを気付かざる彼　麻
犬猫も脅へる仕草地震(なゐ)の島　敏
雪の印は飲むに飲まれず　恵
優勝のシャンツェを照らす月あかり　郁
悪魔に心売りしドラキュラ　千
亡き父の煙管掃除が目に浮かび　麻
菓子の包みは幕末の絵図　敏
一分咲き今年の花を占ひて　恵
初鶯に気持ち和みぬ　郁
サンテグジュペリ夜間飛行に春の星(ナオ)　千
金平糖を染めて紫　麻
琴を弾く埴輪の像を洗ひ上げ　敏
わが家の紋のルーツいつ頃　恵
サミットに合はせ新札二千円　郁
醜き虎魚(おこぜ)味は最高　敏
へそくりを狙はれてゐる老小町　麻
迫り迫られ夢か現つか　郁
出嚏子も仕方咄もしくじって　恵
五輪候補の親超える技　麻
月皓々酒酌み交はす高階で　敏
毬藻祭りの衣裳借用　恵
滞(ナウ)在の長引く旅のそぞろ寒　郁
通訳試験やっと合格　千
亀戸の天神様の御札売り　麻
膝の痛みもやっと薄らぐ　郁
花爛漫電気自動車ゆるゆると　敏
蚕のねむる村音のひそやかに　麻

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　山崎一恵　東郁子　鈴木千恵子
内田麻子

歌仙「浪速育ち」　松本碧　捌

活鱧や浪速育ちのこころ意気　碧
梅雨雷に響く玻璃窓　久美子
青薄四方に乱るる山陰に　志げ子
煙まっすぐSLを撮る　志世子
客まうけ月の雫といふ新酒　豊美
かそけき声で蚯蚓鳴きたり　水壺
秋(ウ)袷歩幅せばめて坂の町　志
神戸長崎彼の跡追ふ　久
読み返す縁切り状は誤字だらけ　壷
ラップ音楽つのるいらいら　久
サミットが済めばトップはご用済み　志
南氷洋で鯨見物　豊
水洟をすすりつ仰ぐ月の蝕　久
白寿迎へて表彰の沙汰　壷
筆談を知らぬふりして覗きたる　世
留学生に習ふ独逸語　同
神々の住む暗き森花の森　豊
ピーターパンは囀りの中　壷
誘(ナオ)はれし弥生狂言はしごして　志
替りばんこに起す居眠り　壷
M6の地震頻発三宅島　豊
御赦免船の着ける深川　志
俳諧の座には貴もなし賤もなし　壷
髪振り乱しゴキブリを追ふ　志
不可解な十七歳の息子ども　久
体験数には驚くまいぞ　同
この辺で在庫を整理やはり君　志
鋳掛屋が来て鍋の修繕　壷
望の月次郎長の墓照らしをり　世
初猟準備勇みたつ犬　同
焼酎(ナウ)をかけし渋柿つやつやと　豊
灰汁抜けた後残りしものは　志
音訳の市報テープを配り終へ　久
キックボードのよぎる路地裏　同
保母さんの同期が語る花の下　碧
丈を揃へて葱坊主たつ　志

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　副島久美子　蒲原志げ子
秋山志世子　高橋豊美　今宮水壺

歌仙「土用太郎」　八代　嫋　捌

猫に声かけたる土用太郎かな　嫋
　庭のどんがめ連れて挨拶　和子
稀覯本混る蔵書を曝し居て　常義
　細工を凝らす模型飛行機　嫋
大食ひの大会月を待ちながら　和
　葉唐辛子を笊にいっぱい　義
焼(ウ)け跡の寂光院に木の実降る　嫋
　新発意さんにちょっと惚の字で　和
幼な恋はじめはいつもかくれんぼ　義
　売り地あります野っ原の果　嫋
沖縄のサミット不評人よらず　和
　指笛だけでひとりカチャーシー*　義
左遷(とば)されて月光浴びるちゃんちゃんこ　嫋
　屋台熱燗俺の友達　和
ムッシュウはジャポネですかと不意に聞く　義
　顔に合はない似非の金髪　嫋
あやかしの花に怨霊宿るらん　和
　明けの春雷夢に遠のく　義
松蝉(ナオ)の響きの中の心地良き　きよみ
　立ち上がりたるネット情報　嫋
旅に来てまづはジョギング大統領　和
　坂を昇れば海と白い帆　義
絡まりし小指の動悸木陰にて　み
　罪作る度髭をたくはへ　嫋
とりあへず連れ子三人爺と婆　和
　干し場に並ぶ布団かいまき　義
真向かひに裾野広がる八ヶ岳　み
　不登校児は狆に癒され　嫋
高窓にいざよふ月のしらじらと　み
　守武忌なり千句詠み終へ　和
笑(ナウ)みもわく夜業の後のコップ酒　義
　逃せし魚をおほぎやうに言ひ　嫋
千曲川ここより信濃川となる　み
　アブストラクト画困る見物　和
としどしに花の香りのなつかしく　嫋
　豆炒る母の手元あかあか　義

*沖縄の自由舞踊

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　武田和子　生田目常義　小出きよみ

歌仙「翡翠」　山口　美恵　捌

翡翠の川たかぶらす刹那かな　美恵
　まだ揺れつづく夏茱萸の枝　路子
ファクシミリ吐き出す熱を掌に　健悟
　国の訃が嬉しくもあり　珠枝
若きらの自負心照らす月の影　蓉子
　新蕎麦を打つ会のたけなは　悟
からからと(ウ)風に鳴りゐる種瓢　路
　ペンシルみたいなスタイルが好き　同
キス三度チェスの勝負に賭けてまで　蓉
　世間知らずも武器になるらし　悟
脛齧り捨て台詞のみ達者なり　枝
　怒りあらはに伐折羅神将　路
弓張の吹き流さるる凩に　悟
　熱燗ぐっと衿たてて飲み　路
執筆の取材はどこか刑事めき　悟
　料金不足戻る郵便　路
ようそろと岬の花に漕ぎ出す　蓉
　春の絵日傘祖母にさし掛け　同
羅宇(ナオ)屋など消えし浅草よなぼこり　路
　歯医者の予約ケータイで取る　悟
覚えたわゲノム・IT・ドットコム　路
　いつ頃届く二千円札　同
抱く間も藍の機嫌を覗きたく　悟
　心変りを隠す香水　蓉
着飾ってゆらりゆらりと熱帯魚　路
　あぶく銭では夢は買へまい　蓉
三線をかかへえいさあコンサート　枝
　塀の鳥居を気にしない奴　蓉
名にし負ふ秋の関鯖味の良き　枝
　港の町に野分過ぎゆく　悟
大戦(ナウ)に逝きし同胞偲ぶ月　路
　鶏を増やせり豚も増やせり　悟
土掘りにリース調達ショベルカー　同
　中也の詩集いつかぼろぼろ　蓉
魔術師は鞄に花をあふれさせ　恵
　蹴ったボールの行方朧に　枝

平成十二年七月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　倉本路子　佛渕健悟　花巻珠枝
　五味蓉子

正江作「吾輩はマリ」、その六年後

秋元 和彦

気持ちは、今でも若いつもりなんだけど、かず兄（にい）に言わせると、僕は、もう百歳近くになったらしい。思い当たるふしがない訳でもない。どうも歩き方が、トロトロとしてきて、かず兄は、宇宙遊泳してるみたいだ、と僕を笑う。失礼な奴だよネ。それに、いつもベッドで日がな、つい鼾をかきながら寝てしまうようだ。

かず兄は、僕が狸寝入りをしていた時、トロンとした眼で「まり、長生きしてよネ♪」と愛情のこもった手で撫でてくれた。とても嬉しかったのだけど、それって、僕の寿命はもうあまり残っていないのかも、と二度目の朝、かつお風味の金缶を食べかけてた時に、ふと気がついた。そしたらかず兄や、僕を育ててくれた正江ママの事を誰かに、どうしても伝えたくなった。ネっ、年寄りの昔話だと思って、ちょっと付き合って下さいナ。

僕は、恥ずかしながら、生まれてすぐ、不忍池に捨てられた猫なんだ。正江ママに言わせると、僕は、ペルシャとかのハーフで、それはもう、可愛いかったそうナ（エヘン）。でも、まだ眼も開かず、ミルクも貰えず、もはやこれ迄と、猫生を諦めかけた時、急に、石鹸のいい香りがした。正江ママの匂いだった。正江ママは、僕に頬擦りして抱き上げてくれた。助かった！と、僕は一瞬でわかった。そして、僕は気を失っていた。

僕が住むことになった秋元の家族は、皆、僕を可愛がってくれた。正江ママは、命の恩人だし、少し強めにニャーと鳴くと、よしよしと撫でてくれて、近くの魚屋さんへ行って「ナマリのいいところ下さい」と、僕の大好物を二日おきぐらいに買ってきてくれた。その魚屋さん、秋元さんちって、随分、なまりが好きな家ね、と思ったとか。それを聞いて僕も笑っちゃったりしました。

でも僕は、なぜか、その家族の中で、かず兄と、一番気が合った。なんか、一緒にいると、不思議と落ち着くんだ。かず兄もそうなのか、家に帰ると、一目散で僕を抱き上げて顔をクチュクチュしてくれた。でも、最近、なお姉（ねえ）が来て、かず兄は、前みたいに、撫で撫でしてくれなくなった。なんか、なお姉に遠慮してるみたいで、少し寂しい。でも、なお姉は、一生懸命に、かず兄の世話をしてるし、僕のご飯もちゃんとしてくれるから、感謝しているヨ。

それよりも心配なのは、正江ママの事だ。正江ママがいなくなってから、僕の髭が、冷たい床を六回撫でたから、かなり長い時が経っているはずだ。

一度、正江ママは、車椅子で帰ってきた。その時、僕は本当にびっくりして、毎日、正江ママのベッドに一日中いた。なんか、守らなくちゃ、と思ったからなんだ。

でも、正江ママは、またいなくなった。その時、正江ママは、和彦を頼むね、と悲しそうな眼で僕に言った。だから、僕は、なにがなんでも、正江ママが戻るまで、かず兄を守らなくちゃいけない、と思っている。でも、正江ママ、少し帰って来るのが遅すぎるよ。僕、不安になってきた。

かず兄となお姉は、週に一回、お花やアイスクリームを持って、どこかへ行っている。帰ったかず兄を見ると、ホッとしたような、それでいて、悲しそうな顔をしている。それで僕は、あぁ、正江ママのお見舞いなんだ、と知った。

あまり、人に言えないんだけれど最近、朝起きて、正江ママの顔がぼやけてしまう事がある。昔は、けして、そんな事はなかったのに・・。

正江ママに抱きしめられている夢を、おとといみた。その正江ママは、小さく歌を歌いながら、中華鍋で、かず兄に料理を作っていた。夢なのに、とてもいい匂いがした。そんな生活は、また、いつ来るんだろう。

でも、僕は、頑張って、長生きするヨ。

また、僕の髭が、少し冷たくなってきた床を触れた。冬が近いのかも知れない。

さぁ、日なたでひと眠りするか。きっと、眼が覚めたら、正江ママがいるんだから。

英語連句の試み　花鳥風月（十五）

浅賀　淑代

もののあはれは秋こそまされ・・ということで、今回は今秋刊行されたばかりの鈴木真砂女の恋の俳句・英訳集 "Love Haiku" (brooks books 刊) より二句。

こほろぎやある夜冷たき男の手　真砂女
crickets——
the man's hands
cold on that night

かのことは夢まぼろしか秋の蝶　〃
were they dreams
or were they illusions——
autumn butterfly

米国のハイク詩人リー・ガーガと新進気鋭の俳人宮下恵美子の共訳。真砂女の百五十句の恋の句が平明で軽快なリズムの英語ハイクに訳され、読み応えがある。また、英語読者に馴染みのうすい季語や句の背景について解説が付されており、それらの情報も興味深い。恋句の手本としてご一読をお薦めします。

さて、脇起二十韻「ねこの子」。前回、鈴木慎二さんから付句を頂戴していました。

1　夜話は第二次世界対戦史　かりん
2　イ　あっけらかんと彼女独酌　慎二
she is drinking alone
who doesn't turn a hair

「あっけらかん」は面白い日本語ですね。二行目、without turning a hairとでもするか・・或いは bluntly(無遠慮に)nonchalantly(無頓着に) daringly(大胆に) 等の副詞を当てたり、keeping one's cool（落ち着き払って）等の俗語を使ってはいかがでしょう。

（一例）　keeping her cool
she pours sake for herself

しかし、やはり恋含みの句。恋は出たばかりですから、ここではあきらめましょうか。

ロ　南北サミットマジックの壷　慎二
north-south Summit,
I'm afraid to be a pot of magic

時事句。朝鮮半島南北のトップ会談は、隣国の印象的な出来事として記憶に鮮明です。米国の青柳フェイさんから、Korea を入れないと当首脳会談の意味合いが出ないとして、

the meeting of two Koreas
a whiff from a magic pot

の訳を頂きました。a whiff（煙・匂い）とは面白い表現ですね。Korea については、特に言い及ばなくとも（仮に曖昧なままであったとしても）良いかと私は思います。そこで、

North-South Summit
a whiff from a magic pot

として治定。慎二さん、フェイさん、有難うございました。次回はいよいよ花の句です。

＊連句と酒＊

「蕎麦屋の酒」　今宮　水壺

国立駅の近くに、時々寄る蕎麦屋があります。小さな、あまり飾り気のない店ですが、手打ちの少し太めでぽきぽきした感じの蕎麦で中々旨い。

店に入ると帳場の壁を背に女性が一人立っていて「いらっしゃいませ」と一言。にこりともしないが別に悪い感じじゃない。お茶が出て、私はもりと銚子一本か二本を注文。壁の裏に向かって、彼女が歌うような調子でそれを伝える。

壁の裏からの返事を聞いたことがないし、どういう人がいるのかは分からない。多分彼女の旦那さんじゃないかと思うんだけど、もう二十年にもなるのにまだ見たことがない。

さて、一週間ほど前のこと、この蕎麦屋の近くの通りで信号待ちしていると突然〈コンニチハ〉と声をかけられた。見ると自転車に乗った蕎麦屋の彼女、初めてみる笑顔でした。

◇ 猫蓑会案内 ◇

猫蓑会初懐紙

○ 日時　平成十一年一月十七日（水）
　　十二時より歌仙興行

○ 場所　江東区芭蕉記念館
　　最寄駅　都営新宿線「森下駅」

▽『猫蓑作品集 十一』作品募集

○ 形式は自由（但し、百韻不可）

○ 一人一篇（捌きは猫蓑会員のこと）

○ 原稿用紙は必ずB4判で

○ 締切　十一月末日

○ 送り先

〒二七七－〇〇五一
柏市加賀二－十二－十一　梅田　利子 宛

猫蓑会同人の　米谷　貞子さんが、七月十六日お亡くなりになりました。

沙羅もみち散る小流れや国分寺　貞子

神の旅

佛渕　健悟

十月は土地の神様が出雲に出かけていなくなるので神無月といい、出雲ではその神々が大勢集まるので神在月という、とむかし習ったが、全国各地より八百万の神々が出雲へ向かって進んでゆく光景を思い浮かべる度に奇妙な気分になったものである。

十月一日　神の旅立ち・神送り（各地）
十日（夜）神迎え（出雲）
十一日～二十五日頃迄、神の出雲滞在
十五日　諸神の正邪や人間の善悪を決定する日
十七日　神等去出神事（出雲大社）
二十四日　〃（出雲大社／十七日に帰らなかった神のお見送り）
二十五日　〃（佐陀神社主催の舟出式）
晦日　神迎え（各地）
十一月晦日　止神送神事（佐陀神社で居残る老神・悪神を送る）

文献を整理すると、神の旅のスケジュールは大体右のようになる（昔は陰暦を用いたので実際の日取りは約一月遅れ）。

神の滞在は一カ所にとどまらず、神魂神社～出雲神社～佐陀神社とお宿のハシゴをする神様もいたり、中にはぐずぐずと一月以上も居残る神もいた。

神々が集まって何を相談するかと言えば、男女の縁結びも大事な議題。

小町には大社でも首ひねり

こんな古川柳を読むと神々のワイドショー的好奇心がムンムンと伝わる。

出雲に旅立つ神あれば、留守番を引き受ける神もあった。志宇神社（能登半島）の神は、旅立つ能登の神々の鍵をあずかり、鍵取大明神とも呼ばれるそうである。住吉大社の神様はその他大勢の神々と一緒はおイヤなようで、十月ではなく四月のお出かけとなる。

このように大騒ぎな神の旅ではあるが、何故に出雲に集まるのかということになると、『出雲国風土記』にもましてや記紀神話にも見あたらないそうである。

吉田兼好は、「十月を神無月といひて、神事にはばかるべきよしは、しるしたるものもなし。本文見えず。（中略）この月、万の神たち、大神宮へ集りたまふなどいふ説あれども、これも本説なし」（徒然草二百二段）と神の旅そのものに冷ややかである。『栞草』で青藍は「（神無月の説は）はなはだしき妄談・・・」と書く。

何事も見えない世界のことである。庶民の旺盛な想像力をかくも偉大なロマンに解放した物語作者に、連句作者の役割と可能性を重ねてみるのである。

質問コーナー

東　明雅

【Q】　先生はこれまで色々な方との俳諧交流がおありかと思いますが、なにかエピソードがありましたらお聞かせください。

【A】　今年の八月一日発行「連句協会報」第一一五号に片山多迦夫さんの「ふしぎな文芸」という一文があり、片山さんが昔交流された先輩たちの話が語られている。その中、清水瓢左、吉岡梅游の両先生はともに芦丈門の大先輩である。昭和六十三年まで連句協会顧問として活躍しておられた瓢左先生については皆さんもよくご存じであろうが、同じ年に歿られた梅游先生は、当時、連句界から引退された格好であっただけに、そんな偉い方が居られたのかと、驚かれた方があったのではなかろうか。

私も実は梅游先生には一度もお逢いしたことはなく、ただ、これも片山さんの肝煎で瓢左さんを交えて文音の三吟を三巻作っただけのご縁に過ぎないが、何故そんな事になったのか私なりに説明してみたい。

私は昭和三十六年に芦丈先生の最晩年の弟子となったわけで、当時、生存しておられた先輩には殆んどの方にお目にかかっている。瓢左先生を始め、寄居の石沢無腸翁、同じく鳥塚江南翁、湘南の小泉漲洋翁・四国徳島の一山一海翁などは、いずれも私を弟か息子みたいに暖かい待遇をして下さった。

ところで、当時の芦丈門の中では、梅游先生の評判は芳しくなく、第一、芦丈先生自身が「梅游は悪達者で困る」と何遍も口にされ、（拙著『芦丈翁俳諧聞書』参照）あまり信用しておられなかった。ご本人を知らぬ私はそれらの噂をまる呑みにして、敢て梅游先生をお訪ねしなかったのである。

何故、芦丈先生が梅游先生を疎外されたか、梅游先生が四十年代「連句滅亡論」を唱え、それを公開されたからだという説があるが、元々梅游先生は芦丈先生の子飼いの弟子でなく、若い時から当時俳諧壇の最大権威であった西尾其桃、その弟子で後に無名庵の庵主となった寺崎方堂と極めて深い関係があり、関東でも芦丈先生の兄貴分であった茂木秋香と父子の縁を結び、その縁で高崎の中村竹邨、ひいては芦丈先生との縁も出来たのである。

さらに梅游先生は頭脳明晰、学識深く、書画に堪能、篆刻の玄人はだしの才人であった。

これらの事に対する感情が重なって、挙句の果に皆から疎外されるようになったのであろう。今だから右の事情が推測されるが、当時の私には何も分からなかったまま、人の噂を鵜呑みにして、すばらしい先輩を敬遠したのが口惜しい。梅游先生がこの世に残された唯一の著書『連句・俳句自選集』（昭和六十二年刊）を読むたびに後悔されるこの頃である。

◇　猫蓑発展基金は随時お受けしております

（一口三千円）

基金の口座　富士銀行新宿西口支店

普通３３７６０４５　猫蓑基金

……§……§……

あとがき

○　パソコン通信を始めたころ、よく〝パソ通人格〟という言葉を耳にしたものである。通信の匿名性が発信者のアイディンティティーと文体を変えてしまうことである。この変身は、窮屈な現実を抜け出す自由を与え、そこで触れる世界は時に現実世界よりリアリティーを持っている。書き言葉でもない話し言葉でもない〝パソ通語〟は、二葉亭以来の言文一致体のようにも見える。しかし、活字離れを言われながら、変身を遂げるためには依然として〈読み・書き〉という通過儀礼を欠かすことができないのが面白い。

季刊　「ねこみの通信」第四十一号
発行者　猫蓑連句会
編集人　町田市金井6-7-6　佛渕健悟
〒一九五-〇〇七二
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ